

伝える力

増田 一世

最近、県内の人権講座などで、福祉や障害のある人に直接関わっていない方々に、精神障害のある人の実際をお話しする機会をいただくようになった。それ自体が大変貴重なことで、喜んで何うことにしている。最近の職場や家庭には精神的な悩みを抱える人も多くなっており、とても熱心に聞いていただいている。痛感するのは、私自身の課題として「伝える力」をつけていかなければならない、ということである。正しいことをお伝えするのは当然のことで、どうやったら受け止めていただけるのか、始終悩みながら取り組んでいる。

そんな折に、「ふるさとをください」という映画の完成披露試写会で、精神障害のある人をテーマにした映画を観る機会を得た。全国の障害者施設や事業者の全国組織である「きょうされん」が30周年を記念して製作したものだ。会員施設が上映権を買うという形で、製作費を工面し、これから全国1800を超えるすべての市町村で上映会を展開しようという企画だ。和歌山県の麦の郷が映画の舞台になっている。

麦の郷は、精神障害のある人だけではなく、障害を越え、そして年齢を越え、地域で共に生きる活動を力強く進めている団体だ。やどかりの里が福祉工場を建設する際にも見学に伺ったり、開設の際には応援に駆けつけてくださったり、「麦の郷ががんばっている、私たちががんばろう」と遠くにあっても励まされる存在だ。

映画が始まり、私の心を捉えたのは画面に映し出される和歌山の風景の美しさ、小六禮

次郎さんのやさしくてあたたかい音楽だった。そして、私をもっとも心惹かれたのは、映画に映し出される麦の郷の活動風景とそこで生き生きと働く仲間たちの姿だった。エキストラとして、障害を持った仲間たちが多数出演しているのだ。この映画は、麦の郷の関係者だけではなく、地元の大勢の人たちと一体になって制作されたのだと聞くと、まさにその地域の人たちとの一体感が画面から伝わってくるのだ。そして、エキストラで参加した麦の郷のメンバーたちは、プロの俳優さん顔負けの存在感だった。麦の郷の持つ力強さとエキストラで出演した彼らの「伝える力」に脱帽したというのが率直なところだ。

「障害のある人の働く場所って、こんなところなんだ」

「生き生きと働いているんだなあ」と映画を見た人たちが感じてくれたらいいなあ、と映画を観ながら考えていた。

「ドラマ」として、精神障害のある人の問題を取り上げるというのが、今回の映画の趣旨のようだ。私の眼にはそのドラマよりも麦の郷の仲間たちの生き生きとした様子が印象に残った。彼らの伝える力が全国各地で、仲間、家族に、精神医療関係者に語りかけ、そして少しずつ理解の輪が広がっていく、大きなきっかけになるのではないかと思った。

そして、この映画といっしょに「やどかりブックレット・障害者からのメッセージ」が広がっていくといいなあ、「映像と活字がワンセットになって伝える力がバージョンアップするはず」と思いつつ映画を観ていた。